

風景構成法に表現される「石」

運上 司子 橘 玲子 伊藤真理子 (新潟青陵大学大学院)

キーワード：風景構成法 石の多様性 石の位置

Stones in The Landscape Montage Technique

Shisako Unjo Reiko Tachibana Mariko Itou (Graduate School of Niigata Seiryō University)

Key words : Stones in The Landscape Montage Technique, Variety of Stones, Location of Stones

I. はじめに

風景構成法は、創案者の中井久夫(1970)によると、箱庭療法の適否を検討するために考案したものとされているが、やがてこの方法が発展するにつれて、箱庭とは異なる側面を持っており、その有効性についての知見が明らかになってきた。アセスメントと心理療法という視点から、風景構成法と箱庭療法およびロールシャッハ法との比較がなされて、風景構成法の特徴が論じられている(中井、1996)。本方法が主として統合失調症のクライアントを対象に展開し、細やかな配慮の元で実施の方法や描画の特徴などが考察されて、特に砂を用いる箱庭療法に比べて風景構成法において侵襲性が低いということは重要な指摘であろう。筆者らも病院臨床をフィールドにしているので、箱庭療法よりも風景構成法はクライアントにかかる負担が少ないことを確認している。

さて、風景構成法はすでによく知られている方法であるが、簡単に紹介しておきたい。まず、面接者がクライアントの目の前で、ソフトペンを持ち、B5~B4の画用紙に額のように枠を書いて、それをペンと一緒にクライアントに差し出す。次に面接者が「これから私が順番に言うのを画用紙に描いてゆき、風景を描いてもらいましょう」と言いながら、まづ、「川」を伝える。次にクライアントが描き終えたと思われたら、山、田(畑)、道、家、木、人、花、動物、石か岩と告げていく。10の要素が描き終わったら、好きなものを描き加えてもらう。このように実施の方法はきわめて簡単で、時間も統合失調症のクライアントであれば数分の時間で終わることがで

きる。

川、山、田(畑)道、これらの要素(あるいはアイテムとも言う)を大景群、家、木、人を中景群、花、動物、石か岩を近景群とすると、大景群で風景の構成がほぼ決まってくる。端的に言えば、最初の川によって以後の構成が非常に影響を受けることになる。中井はこれらの要素によって、風景がどのように構成されてゆくかが重要であると指摘し、同時に面接者-クライアントの関係性においてどのように描かれてくるか、そこでどのような情報が得られるかについて臨床的考察を進めている。さらに、中井は面接者の態度として、クライアントが次の要素をどのように描くかを見守って待っていることが大切であると言及している。ちょうど、ロールシャッハ法の施行時に、どのような反応を出してくるかという期待と関心を持ってカードを渡してゆくことと似ている。更に、中井の論文を読むと、各要素の象徴性などにも触れようと思えばそれも可能であるが、あえて各要素の限定をしないという立場を述べている。柔軟な臨床感覚に裏打ちされていると言える。また、皆藤(1996)が指摘するように心理療法の中でこそ生かされるものであって、単に統計研究をするだけでは、この方法の持つ可能性に迫ることができないという意見がある。これらは心に止めて置かねばならないことである。

筆者らはロールシャッハ法や他の心理アセスメント技法と併せて風景構成法を数多く実施してきた体験から、それなりに有益な情報を得てきているのであるが、どこか主観的な解釈に陥り易い危険性と心許なさも事実、抱えている。筆者らの手元には、臨

床現場で行われた500枚近い風景構成法の資料、さらに、臨床心理学演習で学生に実施した風景構成法の資料が300枚近く集まっており、これらの資料についての客観化からスタートとすることにした。当然のことながら、クライアントと学生では資料の収集状況が全く異なっているので、比較は難しい面がある。本報告は、予備的分析として、学生の資料を対象にして、筆者らが関心を持っている「石」についての分析から手をつけることにした。石の象徴性については山中（1984）が指摘しているところであるが、筆者らが注目した点は石の持つ多義性である。中井が近景群の中に石を入れたのは、植物（花）、動物、鉱物として加えたのだそうであるが、山は山であり、川も家も个性的であってもその本質は変わらないわけだが、石は土台や護岸や宗教的指標、石としての存在感などなど、いろいろな意味に用いられている。また、報告された事例では石が変容していく事例もある（皆藤、滝川）。さらに、筆者らの経験では、時系列で見えていくと石が風景の構成に与える影響はきわめて大きいものがあると認められるので、石と風景構成との関係を主題にしてまとめることとした。

II. 方法

① 対象数：

福祉心理系大学生（2年生、3年生）の作品合計 257枚

② 方法：

30名くらいのクラスで、臨床心理学演習の一環として行った資料である。一部の学生には1年間のフォローがあり4回実施されているが、延べ数として全部同一に扱われている。男女比は約1対3で、女子学生が多い。

③ 整理1：カテゴリーの定義

石だけを単独に分析する立場ではなく、他の要素との関連で分析を目指すため、石と関連して、川、道、野原、その他のカテゴリーに分け、さらにa~kのサブ・カテゴリーを設けて整理した。

1) 川に関連する石

- a. 護岸（川に沿って両岸あるいは一部）
- b. 川の中（流れの中、橋として利用する等）
- c. 川の側（河原など）

2) 道に関連する石

- d. 道の中（砂利として描かれたり、子ども

が石蹴りしたり)

- e. 道の側（道に近接し、次の野原の中の石とは明らかに区別できる場合）

3) 野原の中の石

野原とは中井の要素にはないものであるが、10+付加1の要素が描かれた空白部分を野原とした。全く空白にしておくものもあるが、植物や家や木、田などが描かれて、空白が埋められる傾向がある。地と図の関係から言えば、地の部分でもある。これを野原と名付けてカテゴリーにしたものである。

- f. 野原の中（単に石が置かれていたり、花壇として囲みに使ったりなど）

4) その他

- g. 家の側 h. 木の側 i. 山の上・側
 - j. 田・畑の上や側 k. 空中
- （例えば噴火や隕石など）

5) 複数カテゴリーについて

上記のカテゴリーは単独の場合もあるが、石が川と道の両方にまたがっていて、二つ以上のカテゴリーに属する場合もある。その場合を複数カテゴリーとしてまとめた。例えば、a. 護岸 と e. 道の側に石があった場合、a-eと表示し、それぞれのカテゴリーに追加して分析した。

整理2：

以上のカテゴリー並びにサブ・カテゴリーについて、石の大きさや数量、形、用紙のどの位置に描かれているかなどを整理してみた。

- ・石の大きさは大、中、小、これらの混在

図1 画用紙の位置

1	2	3
4	5	6
7	8	9

- ・石の量は多い、多少、一つ
- ・石の形は丸、角張っている、判別不能に分けた。
- ・用紙は図1のごとく9分割をして、そこに番号をつけた。従って、7、8、9の数は用紙の下方に石が描かれていることを示すものである。

④ 判定：2名の心理臨床家による判定

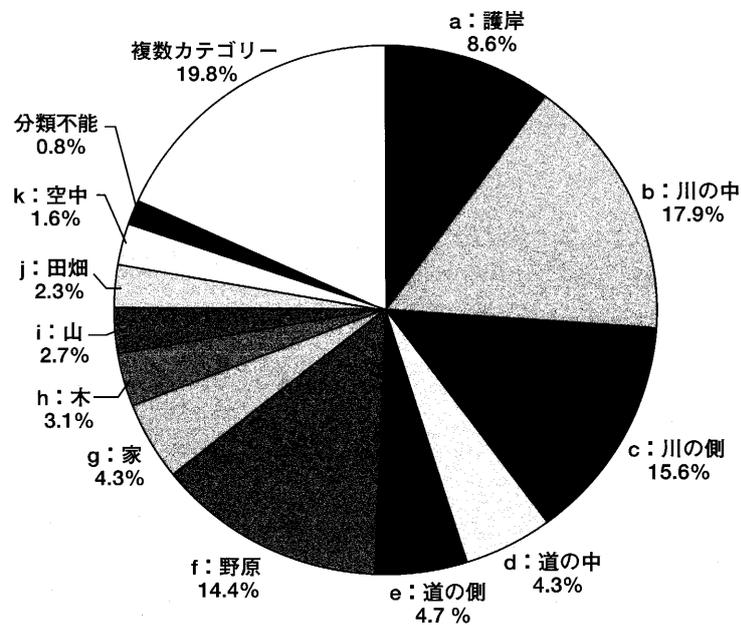
Ⅲ. 結果

結果1：石に関連するカテゴリ全般について
257枚の風景構成法に見られた石についてカテゴリ一別に見た結果が表1、図2である。単一の各カテ

表1. カテゴリ別表示

カテゴリ	カテゴリ%	サブカテゴリ	出現頻度	%
川	42.1	a.護岸	22	8.6
		b.川の中	46	17.9
		c.川の側	40	15.6
道	9	d.道の中	11	4.3
		e.道の側	12	4.7
野原	14.4	f.野原の中	37	14.4
その他	14	g.家の側	11	4.3
		h.木の側	8	3.1
		i.山の中・側	7	2.7
		j.田畑の中	6	2.3
		k.空中	4	1.6
複数カテゴリ	19.8		51	19.8
分類不能	0.8		2	0.8
	100.1	合計	257	100.1

図2 カテゴリ別表示



ゴリー並びにサブ・カテゴリーに示される石の出現頻度と出現率を見ていくと、川のカテゴリーに関連する石は42.1%と最も高い出現率であり、石と川とのつながりが明らかに高い結果となった。更に川に関連する石のサブ・カテゴリーを見ていくと、b. 川の中が17.9%、c. 川の側が15.6%、a. 護岸が8.6%の順位になっていて、護岸が最も少ない。川に続いて石と関連するカテゴリーは野原であった。野原は定義のところ述べてるように、山、川、田などの要素が描かれた空間であり、いわば背景である。ここにある石は、石だけが独立してあるもので、出現率は全体の14.4%であり多いとは言えない。石が何かとの関係で描かれることを反映しているのであろう。次に、道に関連する石はそれが道の中(4.3%)にあるにしろ、道の側(4.7%)にあるにしろ、全部で9%と出現率はさらに低くなる。従って道と石の関係はわずかであると言える。その他の石の描画はサブ・カテゴリーとして、g. 家の側、h. 木の側、i. 山の中・側、j. 田畑の中、k. 空中等に見られるが、いずれも1割以下で、全部合わせても14%と少ない。あえて拾うならば、その中では家の側の石が4.3%、木の側の石が3.1%でわずかながら多いことになる。

次に複数カテゴリーについては、先の整理1でも述べたように、石はただ一つのカテゴリーに該当するわけではなく、2つ以上のカテゴリーになることがある。この出現率は表1に示したように19.8%であった。従って2つ以上のカテゴリーに石が関係する割合は全体のほぼ2割である。

結果2：各カテゴリーと複数カテゴリーについて

単一の各カテゴリー並びにサブ・カテゴリーに複数カテゴリーを加えて整理した結果が表2、表3である。各カテゴリー別にその出現頻度と出現率及び特徴を見ていく。

まず、表2では、川に関連して置かれた石が複数カテゴリーも加えて303例中(注. 複数カテゴリーが該当するサブ・カテゴリーと合わされるので、全例数257よりも多い総数になる)160の高い出現頻度を示していて、川に関連する石の表現が圧倒的に多かった。これは結果1でまとめられた特徴と同様である。さらに表3で、川に関連する石を詳しく見ると、サブ・カテゴリーによって石の描画の違いが明らかになった。川の中(40%)と川の側(41%)の出現率はほぼ同程度であった。しかし、その内容を、表

2の結果で詳細に追っていくと、川の中の石(出現頻度64)は石の大きさが大(出現頻度22)であり、石の形は丸い方が幾分多くなっている(22:29)。また、石の使い方としては、橋、流れの妨害、飛び石などが描かれている。それに対して川の側の石(出現頻度66)は石の大きさが大小混在(出現頻度28)している。石の形は半数以上(出現頻度40)が丸く、これは川の中の石で少しかがえた傾向をもう一歩はっきりさせている。以上、川に沿って石が置かれるので用紙に描かれた領域は広くなり、用紙の中央下方に多くある(図3参照)。

図3 川に関連する石が描かれた用紙の領域

1	2	3
■	■	■
■	■	■

次は、道に関連した石について述べる。表1と表3を見比べると明らかなように、複数カテゴリーを加えた場合(表3参照)になると、道に関連した石の出現頻度(48)が急に多くなる。その増加の源は道の側の複数カテゴリーにある。しかも、道の側の複数カテゴリーは全部で19例で、そのうちの13例が川の側との組み合わせ(c-e)であった。この場合、表2によると、石の大きさは大小の混在(出現頻度13)が多い。また、ここに該当する石は図4で示したように、13例の石全てが用紙の領域において左寄り下方にあった。他方、同じく道の側の複数カテゴリーで石が用紙の中央に多く集まっている結果が見られたが、これは道と川以外の複数カテゴリーの組み合わせであった。このように道に関する石は川と道の複数カテゴリーにおいて最も関連があり、道と川の接点や交差するところに石を置く傾向が明らかとなった。

表2. 各カタゴリーに見られる石の特徴

カタゴリー	出現頻度		石の大きさ				石の数量			石の形			用紙の領域								
	サブカタゴリー	出現頻度	大	中	小	混在	多	多少	1個	まる	かど	判別不能	1	2	3	4	5	6	7	8	9
川 (160)	a 護岸	22	5	6	4	6	20	2	0	14	5	3	1	5	4	9	15	11	9	12	8
	複数カタゴリー	8	0	1	0	7	8	0	0	3	1	4	3	4	4	4	7	5	5	7	2
	b 川の中	46	20	13	7	6	9	25	12	19	20	7	3	10	9	6	15	13	10	26	13
道 (48)	複数カタゴリー	18	2	1	2	13	7	11	0	10	2	6	3	3	4	11	9	10	8	13	6
	c 川の側	40	12	9	5	14	11	19	10	25	9	6	3	1	3	8	21	10	9	15	8
	複数カタゴリー	26	4	2	6	14	8	16	2	15	7	4	3	1	1	15	12	8	8	11	12
野原 (43)	d 道の中	11	0	3	8	0	4	3	4	7	0	2	0	0	0	2	3	2	4	6	2
	複数カタゴリー	6	0	2	0	4	2	4	0	1	4	1	1	2	1	4	3	1	3	4	3
	e 道の側	12	4	3	3	2	3	5	4	6	6	0	1	0	1	1	2	4	2	1	4
その他 (52)	複数カタゴリー	19	4	0	2	13	5	12	2	9	5	5	3	1	4	9	7	7	6	4	4
	f 野原の中	37	15	9	6	6	6	17	13	18	15	3	1	1	3	4	8	8	11	10	13
	複数カタゴリー	6	1	2	0	3	2	4	0	3	3	0	0	3	4	3	4	3	1	3	3
j 田畑の中	g 家の側	11	3	4	2	2	1	6	4	6	5	0	1	1	1	4	2	1	0	4	4
	複数カタゴリー	4	1	0	1	2	1	3	0	1	0	3	2	2	2	1	2	2	2	1	1
	h 木の側	8	3	2	1	2	1	5	2	4	4	0	1	0	1	2	1	2	1	0	3
k 空中	複数カタゴリー	6	0	1	1	4	2	4	0	4	0	2	3	0	2	3	4	2	3	3	1
	i 山の中・側	7	4	2	1	0	1	1	5	3	4	0	0	4	2	0	1	0	0	0	0
	複数カタゴリー	3	0	1	0	2	1	2	0	0	2	1	0	1	1	0	1	0	1	3	2
合計	j 田畑の中	6	1	3	2	0	3	2	1	2	3	1	1	1	0	2	2	2	2	2	2
	複数カタゴリー	3	0	0	0	3	0	3	0	1	2	0	0	1	2	2	2	2	0	3	1
	合計	303	80	64	51	104	95	146	61	152	100	48	32	42	49	91	122	93	85	128	92

表3. 川・道・野原に関するサブ・カテゴリーと複数カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリーと複数カテゴリー	頻度	%
川	a. 護岸	22	13
	複数カテゴリー	8	5
	b. 川の中	46	29
	複数カテゴリー	18	11
	c. 川の側	40	25
	複数カテゴリー	26	16
	合計	160	99
道	d. 道の中	11	23
	複数カテゴリー	6	13
	e. 道の側	12	25
	複数カテゴリー	19	40
	合計	48	101
野原	f. 野原の中	37	86
	複数カテゴリー	6	14
	合計	43	100

図4 道の側と川の側の石が描かれた用紙の領域

1	2	3
■	5	6
■	8	9

野原に関連する石は、表3を見ると、道に関連する石とほぼ同程度の出現頻度（43）である。しかし、道に関連する石の特徴と異なり、複数カテゴリーが14%と非常に少ない。また、表2から、野原にある石は大きさが大で（出現頻度15）その場合には1個描かれることが多い（15例中13例）と言える。また、野原には、花壇とか、井戸やお墓などの個性的表現が目を引く。野原にある石は圧倒的に用紙の下方と続いて中央右寄りである。

図5 野原に関連する石が描かれた用紙の領域

1	2	3
4	■	■
■	■	■

その他の石の描画は、52の出現頻度であるが、表2に分類記載してあるように、その中には、家の側15、木の側14、山の中・側10、田畑9、空中4を含んでいる。細かく拾うならば、他のカテゴリーとの組み合わせが比較的多いのは木の側の石である。しかし、これらの項目を全部合わせても全体の17%である。これらのカテゴリーの出現頻度が少ないことは明白である。その中には個性的な石の表現（例えば、家の土台や囲み、木の囲み、山の上の石碑、隕石、落石、山の噴火、石投げなどなど）も見られた。最後に、石はどの要素と関連するにしろ用紙に描かれる領域は下方から中間領域に描かれることが圧倒的に多かった。小さな石であっても、石が主役でなくとも、石の存在は下方であると言える。

1	2	3
4	■	■
■	■	■

IV. 考 察

本研究は臨床心理学演習として大学生に実施した風景構成法を用いて、今後の研究の予備的調査としてまとめた。従って詳しい統計的検定などを省略しているが、いくつかの特徴が見られたのでそれらについて考察をしておきたい。

まず、石を取り上げた理由については、はじめの所で述べたように、風景の構成が変わる際に石も動いて、描画の最後に置く石の存在感が大きいという臨床的印象から出発をした。さらに、石が多様に利用されていること、きわめて個性的な意味合いも帯びること、石の多義性について筆者らが興味を抱いていたこともある。研究をまとめるにあたり、石をどのような切り口でまとめていくかが問題となっていた。あまり客観的とは言えないが、よく出会う風景の一部として、思いつくままに取り上げたのが、カテゴリーとして定義した項目である。試行錯誤をしている中で、今回のカテゴリーの作成となったが、このことは皆藤(1994)が統計研究の手続で述べている構成プロセスという考え方にきわめてよく似ている。これらから表現される石の固有性と共通性について述べてみたい。

1. 石と川の関係

結果1で述べたように石は川と関連して表現されることが明らかになった。実施にあたって、要素の提示順位が、川から始まり、石で終わることを考えると大変意味深いことである。大胆に言えば、風景構成法には循環性というか完結性といってもよい性質があるのかもしれない。いずれにせよ完成度が高い方法と言えよう。川は絶えず流れ、絶えず変化するもので、山中の指摘を待つまでもなく無意識と理解されることが多い。それに対して石は変化しない硬いもので、川と石はある意味で対比的である。石が古から特別な意味をになっているのも、変化しない、永遠なものとして人々の心に触れているからであろう。また、世界各地にある聖なる場所はほとんどが水の湧き出る泉と石の組み合わせであることも連想される。中井は石を要素として入れていなかったのだそうであるが、後になって、動物、植物があったので、鉱物として入れたという。改めて、中井の臨床感のすごさに驚かされるのである。石の存在がこの方法を非常に豊かにしたと言える。

さて、石と川の関係で最も目を引くのは護岸である。護岸は川に沿ってぎっしりと置かれたり一部分

であったり、比較的ルーズに置かれたりする。このように、石は目的にかなうように利用されている。理解としては、明らかに川の流れを守り、水が溢れ出ることを阻止するものであり、この意味で護岸に石を使うのは、たぶん個別的ではあるが、心理的には共通するところが多いであろう。例えば、コントロール、強迫性、安全の保持、守り、こだわり、粘着性などなど、これらからは自我機能の強化が推測される。

石と川の関係で、全体を見ると、石を川に入れたり、川の側に置いたりしている。今回は触れていないが、対象となった学生たちの風景構成が変化した例には、石が川に入ったり出たりするものが見られた。川という無意識性と接点を持ちながら人格の変化が生ずるのかもしれないが、この課題については時系列でフォローした資料数を増やして検討したいと考えている。発表されている事例には石そのものの変容(皆藤、滝川)が見られているが、学生の風景構成では石が川から出たり入ったりという変化で見られることから、臨床例と青年期の発達上の変化とは何か質が異なるのかもしれない。

なお、川と関連する石の特徴は、川の中にある石は大きくて用紙の中央領域に置かれている。水に流されない石、大きくて中央にある石は描き手自身の姿なのかもしれない。他には、二つの世界を結ぶ橋の役目を担ったり、流れを遮るようなものもあたり多様であった。

2. 石と道の関係

石と道の関係では、複数カテゴリーを加えると、石との関係が多くなった。結果の2で述べたように、道に関する石は道の中にある場合など、単一のカテゴリーでは少なかった。複数カテゴリーになって多くなった理由は、川と道の両者が接近したり交差している位置に石が描かれる場合が多かったことによる。道は、中井、山中によると、要素を結び、方向性を示すもので、意識性が強いと意味づけられている。そう仮定すると石は意識性を示す道よりも、川で示される無意識性と関係があると考えられる。しかも空間表象として無意識界を示す領域に表現されると言うことは興味深い結果であった。道と川の接点や交差点に、つまり、意識と無意識の接点に石が置かれるということは、意識と無意識との交流によるパーソナリティの変化が生じているところに石が存在しているということである。この石は、ともすると危険を伴う意識と無意識の交流に、ある種の守

りや急激な変化を抑えるような働き、鎮魂、あるいは変化や変容の核となるような働きがあるのかもしれない。橋が二つの世界をつなぐよりももう少し無意識の水準の問題を示しているとも見られるだろうか。川と道の接点にある石を見ていると、不可思議なむしろある種の宗教的なものを感じ取れることもあったが、このような結果を見ると直感だけではない客観的な分析を試みたくなる。健康な学生たちの特徴なのかどうか、障害者のそれとの比較が今後待たれるところである。

3. 野原にある石

次に、野原と石の関係では、道が石とはあまり関係がなく、川と道のように複数カテゴリーで意味があったことは異なり、野原には複数カテゴリーの出現が非常に少なかった。定義で述べたように地と図の関係で見れば野原が地であることも関係ある。

野原にある石は、大きくて、しかも1個で、用紙の下方に多くが置かれた。石としての存在感が大きく、構成的にはむしろ独立していて、安定感をもたらすこともある。あるいは、逆に自分のものとして引き受けたい何かを示しているのかもしれない。また、ここには井戸やお墓、花壇の囲みとしての石など、個性的に利用されたものが見られた。

4. その他

最後に、その他の石の表現は、家の側、木の側、山の中、田の側、空中などに、5%程度の出現率があった。いずれも数が少ないので、特別には取り上げなかったが、空中では隕石があったり、噴火の石であったりユニークなものが見られた。

これまで述べてきたように、石は大景群の川と関連が強かったが、また他の中景群や近景群により添うことが多く、同時に用紙の下方にほとんどが描かれていた。石が大地の一部であることを思えば当然であろう。中景群の要素のように直接人間の領域にあるものではないが、かといって全く土地の一部として背景と同化しているわけではない。石には隕石で宇宙から来た石とか、山から転がってくる石のように、何か世界を少し動かすような、意識の世界に異質なものを運ぶようなところがあって、トリックスターの要素も包含しているかもしれない(学生たちに最後に石を描きなさいと提示すると、多くの学生がエーッとびっくりする声を発する)。

以上、主に石と川の関係、道との関係について検討した。なお、各カテゴリーの特徴をよく表現していると思われる描画を6枚選び、最後に提示する。

今回、石についてのいくつかの仮説も見えてきたので、次の課題は継続的に行った風景構成法の特徴と、精神障害に罹患しているクライアントの風景構成法の検討などを行う予定である。

V. まとめ

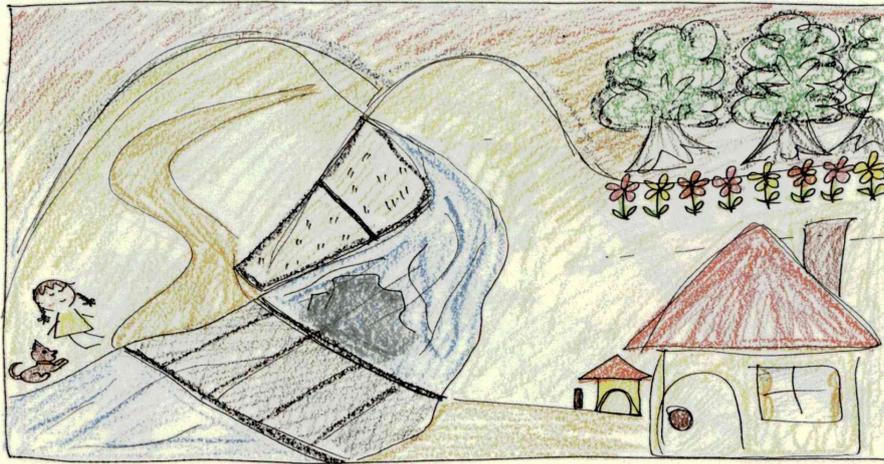
1. 石は川との関連で描かれることがもっとも多く、単独で描かれることは少ない。
2. 石と道の関係は複数カテゴリーで表現され、石は道と川の接近又は交差の所に描かれている。無意識と意識のふれあうところでの石について考察した。
3. 石が野原にある場合は1つで独立して大きい特徴があった。
4. 石は多様な意味を持つと同時に、単独にあるのではなく他の要素に寄り添って表現されることが多い。この場合、寄り添うことで、要素を特別な存在にする。

文 献

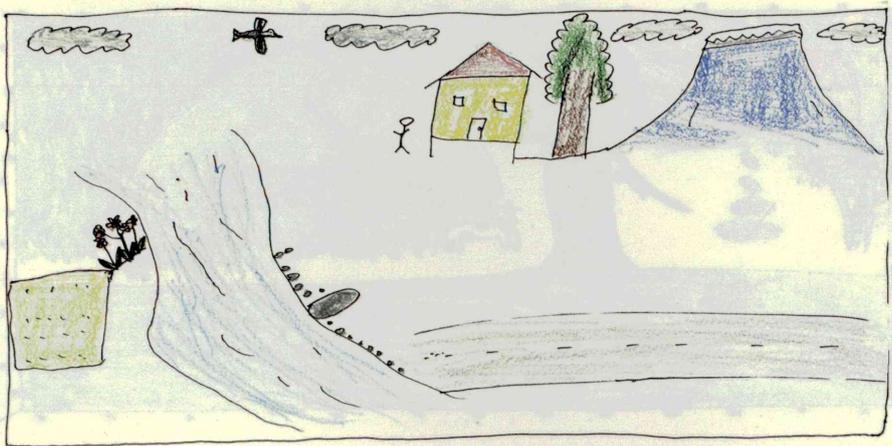
- 皆藤章(1994):『風景構成法 その基礎と実践』 誠信書房
- 皆藤章・川喜克哲(2002):『風景構成法の事例と展開』 誠信書房
- 皆藤章(2004):『風景構成法のとくと語り』 誠信書房
- 河合隼雄(1984):『風景構成法について』 山中康裕編集 中井久夫著作集別巻 『H・NAKAI 風景構成法』 岩崎学術出版 245-259p
- 中井久夫(1984):『風景構成法と私』 山中康裕編集 中井久夫著作集別巻 『H・NAKAI 風景構成法』 岩崎学術出版 261-271p
- 中井久夫(1992):『風景構成法』 『精神科治療学』 7(3) 237-248p
- 弘田洋二(1986):『風景構成法の基礎的研究』 『心理臨床学研究』 3(2) 58-70 p
- 山中康裕(1984):『風景構成法事始め』 山中康裕編集 中井久夫著作集別巻 『H・NAKAI 風景構成法』 岩崎学術出版 1-36 p

<印象深い描画>

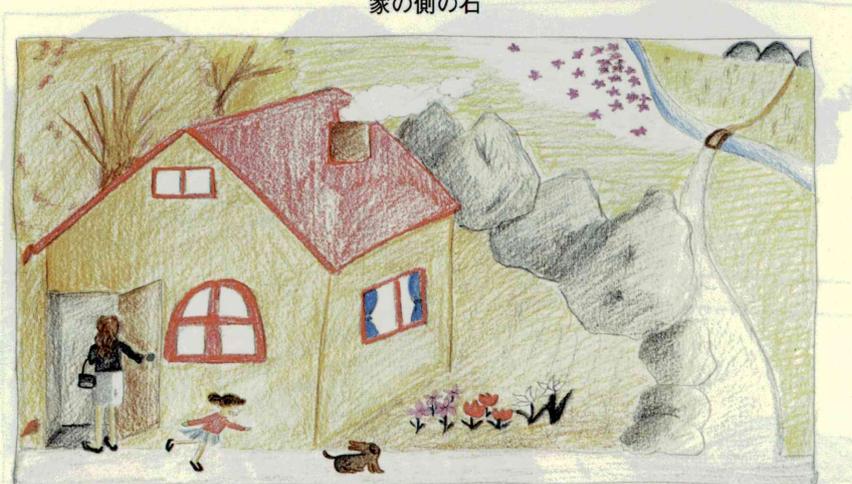
川の中の石



道の側と川の側の石

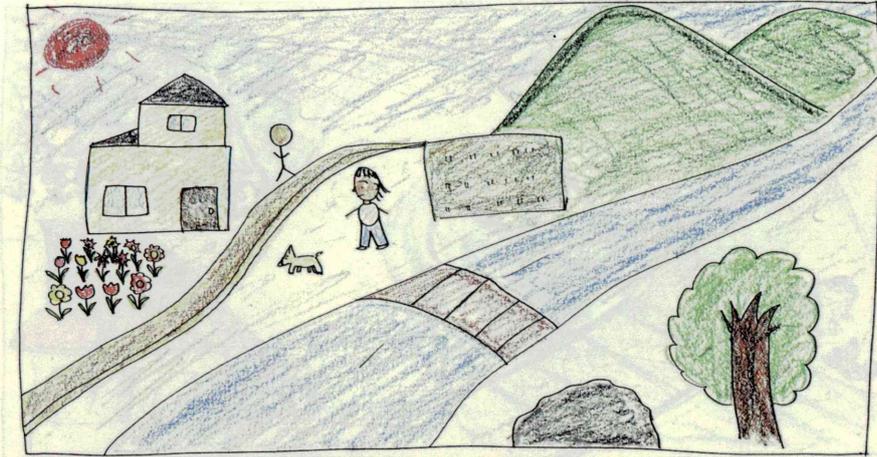


家の側の石

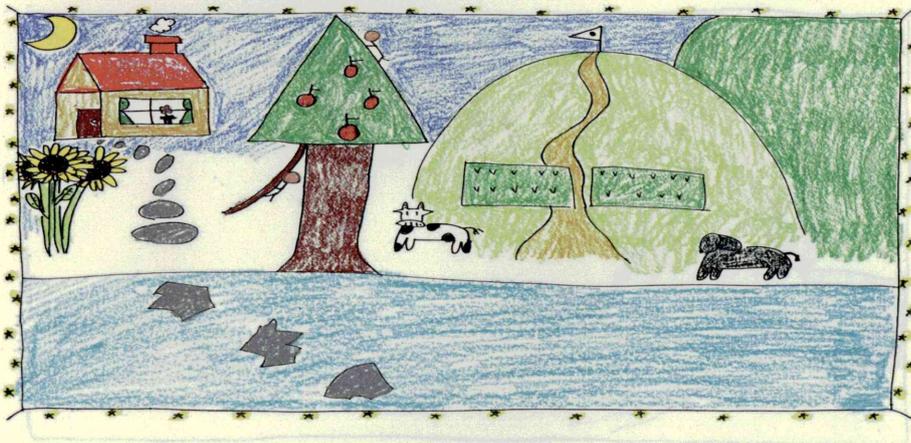


風景の要素②

野原の石



川の中と家の側の石



道の側と木の側の石

